

第Ⅲ章

研修会の意義を再考する



1. 研修会の成果

第Ⅰ章と第Ⅱ章で触れたように、研修会を実施するたびに何らかの問題が生じ、それらを課題として次の研修会では解決しようと試行錯誤を繰り返した。国や文化の違いを超え、共同事業として教師研修を行う際の参考となるように、ここでは主にその成果に焦点を当てて述べることにする。ただし、成果と一口に言っても、研修生にとっての成果もあり、主催者にとっての成果もある。研修生にとっては、一人ひとりの研修生がそのニーズや期待を満たすことができたかどうかが成果の判断基準になろう。一方、主催者にとっては、研修生のニーズや期待に応えることができたか、事業理念を反映させることができたか、事業趣旨を達成することができたかどうかが判断の基準となる。したがって、主催者としては、共催者それぞれが成果の判断をしなければならないが、本章では、研修生や研修会に関わった人々へのアンケートやインタビュー、投稿原稿などを踏まえて、日本側主催者の中心であったTJFの視点から研修会を振り返り、その成果をまとめてみたい。

研修会の成果について考えるとき、もう一つ認識しなければいけないのは、アンケートなどで統計的に全体傾向を把握することはできるが、一人ひとりの研修生では、背景事情がかなり異なり、すべての研修生に同じ成果を求めることはできないし、また求めるべきではないということである。なぜなら、7回の研修会に参加した523名の研修生の日本語力、学歴、教師歴、教師としての力量、また所属している学校の状況（民族や地域の差、経済状況、受験体制等）や学校での待遇（給料の額や支払い状況）は実にさまざまであり、研修会への期待や研修会に臨む姿勢、吸収力も一様ではないからである。アンケートの調査結果にもあったように、「研修会直後は確かに日本語力が向上したと実感したが、1年ほど経つと元のレベルに戻ったような気がする」という教師もいれば、新しい教授法に対して吸収力があり意欲も高いが、経験のなさから十分にそれを生かせなかった教師歴の短い教師もいた。また教師歴が長い教師の中には、研修で学んだことを生かす力はあるが、逆に自分のスタイルを急に変えることができな

時間がたって分かった、研修会で得たもの

私は、ハルビンで開催された1998年の研修会に参加した。研修会直後よりも、時間がたってからのほうが、研修会で得たものの大きさを実感している。私は授業でできるだけ日本語を使うようにしているが、これは研修会で日本人と交流したことで、日本語で話す自信がついたからだ。また、授業をどのように進めたらいいか、授業を活発にするためにどのような教室活動を取り入れたらいいかと考えるときに、研修会の講師がやっていた方法を思い出して参考にすることがよくある。授業の方法について、やはり研修会に参加したことのある同僚とよ

く相談するようにもなった。

私が受けた講義の講師は、笑顔で研修生に接し、教室の雰囲気をよくし、いろいろな教室活動を取り入れて楽しい授業にしようとしていた。私も実際にロールプレイなどの教室活動を取り入れてみたが、生徒の反応もよく、学習効果も高いようだ。研修会で日本人講師の授業を受けるうちに自然と教授法を学べたのだと思う。

田晶（大連市第一中学）

（インタビューをもとにTJFがまとめました）

い教師もいた。

わずか2週間の研修一回で問題がすべて解決するはずがないことは当然である。また、研修生自身が研修で学んだことを日頃の教育実践に生かそうと努力したかどうかにかかっている部分も大きい。その意味でも、研修会で得た成果を定着させるためには、研修会終了後のフォローアップとともに、地域に根ざした教師研修をたとえ小規模であっても継続する必要があると考える。むしろ研修会の意義は、その契機と土台をつくることができたかにあるのではないだろうか。

(1) 日本語力と教授力の向上

研修会の成果を測る明確な基準の一つは、研修生のニーズに応えることができたかどうか、ということであろう。その意味においては、本研修会は一応の成果が得られたといえる。研修生の最大のニーズは「日本語力の向上」であり、さらに、「日本語力の向上」に比べると少ないものの、年々高まっていった「教授力の向上」というニーズであった。今回のアンケートの結果からも分かるように、この二つのニーズに対して、研修生の約7割が満足している。これは、技能別の講義をカリキュラムの中心に据える一方で、それらの講義を行う際に意図的に教授法や教室活動にバリエーションをもたせたり、「教授法(教材・教具、教室活動)」関連の授業の割合

自信を取り戻させてくれた研修会

私は大学時代から日本語が大好きで、一生懸命勉強した。努力の甲斐あって、大学を卒業するとき、「優秀卒業生」として表彰された。卒業後、情熱を胸いっぱい抱いて故郷に戻り、高校で日本語教師の仕事を始めた私を待っていたのは、洗面器いっぱいの冷たい水を頭からかけられたような厳しい現実だった。学校には、教科書と教師用指導書以外に何もなく、テープレコーダーのような基本的な音声設備さえなかった。そうした「ないない尽くし」の環境のなかで、教師たちは大学入試に対応するために、単語や文法の教え方を模索し、詰め込み教育を行っていた。一方、生徒たちは、膨大な文法ルールと山のような練習問題で苦しみ喘いでいた。教える側にとっても学ぶ側にとっても、決して楽しい作業ではなかった。もっとも苦痛だったのは、自分自身、日本語の読み書き、聞く話す能力がどんどん下がっていくように感じることだった。毎日毎日、毎年毎年同じことを繰り返し、教師自身が日本語を話せない、そして、話す勇氣もなくなっていくのだから、生徒の日本語力、特に話す能力がいかなるものか、想像に難くないだろう。

幸運にも私は、1999年の研修会に参加する機会を得た。それは私にとって、心のなかに春風が吹き込んできたような経験だった。蒸し暑い夏だったが、講師たちは毎日熱心に教授法や文法などを教えてくれた。大学を卒業してから七、八年ぶりに体験する学びの場であった。

私は教室内では貪るように講義を聴き、教室外では積極的に日本人講師と交流した。今では日本人に「日本語がうまいね」とよくほめられるが、研修会での経験が、なくしていた自信を取り戻させてくれたことは確かである。半月足らずの短い研修期間だったが、日本語を話す能力は飛躍的に進歩したように思う。と同時に、研修会を通して感じたことは、外国語教育において先進的な教育設備が揃っていないなくても、教え方を工夫すれば、半分の力で倍の効果を得ることができるということである。

研修会を終えて学校に戻ると、それまでの活気のない教え方を一新した。文法だけを教えるのではなく、私自身できるだけ日本語で授業を行うとともに、生徒には読み書き、聞く話す訓練をバランスよくさせるようにした。生徒たちは以前とは違って学習意欲を示し、私だけでなく、生徒たちも積極的に日本人と日本語で話せるようになった。今私の生徒たちは埼玉県志木高校の生徒たちと文通交流をしている。なかには、電話をかけ合う生徒もいるようだ。

日本語教育という仕事はこんなにも楽しいものだったのかと改めて感じている。これからもっともっと励んでいきたいと思う。

包華(阜新県蒙古族高級中学)
(TJFで翻訳、編集しました)

を一定の割合で組み込んだりした成果であろう。

(2) 研修生へのエール

「日本語力が明らかに向上した」という研修生、「新しい教え方を多く学んで自分の授業に生かしている」という研修生の声が多く寄せられたことは、主催者として大変うれしいことである。しかし、この研修会の目的は、単に研修生のニーズに応え、彼らの日本語力や教授力を向上させることだけではなかった。

2週間の研修で得られる成果には限りがある。この短い期間内に、日本語や教授力の向上よりも大切なのは、一人ひとりの研修生が研修会を通じて自分の日本語力や教授力を相対化し、課題を認識し、その課題を克服する方法、ヒントや努力目標を知ることであろう。それが明日への活力ともなるのである。

中高校の日本語教育を取り巻く環境がだんだん厳しくなっているなか、多くの研修生は日本語教師という仕事ないし教師という仕事自体に対し自信や価値を見失っていたが、研修会への参加を通じて、さまざまな場面で励まされ、日本語教師という自分の存在意義を再確認したという。こうした研修生の今後の活躍が大いに期待できるのではないだろうか。

(3) 「文化理解」の促進

TJFは、海外における中等教育レベルの日本語教育の大きな目的は、日本語を話す人と積極的にコミュニケーションを図り、交流しようとする姿勢を育てること、言語と同時に文化に対する理解を深めることであると考

文化に触れ、教師のやりがいを見つけた

大学卒業後、憧れの仕事に就けなかった私は、ぼんやりとして初めての教壇に立った。もちろん、時間がたつにつれ、「教師」というものに対する認識もだんだん変わってきたが、本当に教師という仕事に魅力を感じたのは、研修会がきっかけだった。

外国語の授業は長い間、文法中心に行われてきた。そのために、外国語の背景にある文化は見失われ、外国語教育の本来の目的も無視されるようになっていた。文法中心の教育を受けた教師が、同じように生徒を教えている現実を決して望ましいものではないが、多くの外国語教師は文化に触れる機会がなく、テキストに頼るしかない。私も研修会に参加するまでは、そんな教師の一人だった。研修会で日本文化に触れ、日本人と交流することができて、私の考え方は変わった。研修会後は、言葉と文化を結び付けて日本語を教えるようになった。

文化は世界を豊かにし、言葉は文化と文化を結んでいる。「自文化」も「異文化」も、それぞれ独自の魅力があり、お互いに吸収し合い、大切にしていかなければならない。私は、文化を伝えると同時に、文化の美しさを感じ、味

わっている。文化の美しさに気づかせてくれた日本語、そして日本語教育に関する研修や交流の機会を提供してくれた方々に心から「ありがとう」と言いたい。

研修会で見つけたもう一つのもの。それは、教師としてのやり甲斐だ。研修会では多くの日本人講師の情熱に触れ、感動すら覚えた。それまでの私にとっては、「教師」は単なる仕事でしかなかった。さらに、研修会后、福島にある公立高校と交流する機会があり、同校の校長の教育に対する熱意にもまた感動した。そして、ますます教師としてのやり甲斐や責任を強く感じるようになった。

日本語教師をしていたからこそ、このようなチャンスに恵まれたのだと思う。日本語教師になって幸運だった。教師のやり甲斐を見つけてから、教育への愛着、生徒への愛情が強く湧いてきた。生徒には知識を教えるだけでなく、文化の美しさを伝える使者として、愛を注ぎ、心を込めて教育をし、立派な人材に育てたいと思う。今、私は、「教師」であることを誇りに思っている。

孫栄娟（瀋陽市二十中学）

えている。そのために、TJFでは言語学習と文化理解を統合した日本語教育の実現をめざしてきた。

しかし、研修会発足当初の頃は、「文化理解」に対する研修生の姿勢は、日本固有の伝統文化について知識を得ることであるというものが多く、一般的に「文化」に対するニーズや関心は低かったといえる。しかし、TJFとしては、カリキュラムやプログラムを組む際には、あえて積極的に、また意図的に「言語学習と文化理解」について考える時間を設けた。具体的には、文化事情を含む「聴解・口頭」の授業、教科書の文化コラムについての特別講義、異文化間教育に関する特別講義、写真教材を使ったワークショップなどであった。こういった努力が、5割の教師が研修会に参加して良かったこととして「文化を扱う重要性が分かった」ことを挙げたことにつながっているといえるだろう。

(4) 研修生や学校間のネットワーキング

アンケートの結果からも分かるように、研修会後、予想以上に研修生同

言語教育の重要課題を先取りして

言語は民族や国民の性格、人間関係など社会文化を反映したものである。したがって言語を教えたり習得させる過程において関連する文化的背景を紹介したり身につけさせたりすることが必要となる。言語教育において関連する文化背景知識を取り入れることは、21世紀の外国語教育の重要な要素となっている。しかし、中国の中等教育では、例えば日本語教育において言語と文化の関係は、1990年代半ばの時点でまだ明確に認識されていなかったように思う。

1997年の研修会に参加したとき、私は長春市第八中学の教員だった。当時の学校教育ではまだ「素質教育」を提唱しておらず、学校は生徒のテストの点数、特に大学入試の点数に基づいて教師の評価を行っていた。授業では語彙や文法を教えることが中心で、日本文化に関する内容を扱うことは稀であった。

2週間という期間は長くはなかったが、研修会で得たことは多かった。日本人講師から進んだ教育理念や方法を学んだり、日本人の仕事に対する勤勉な精神を身をもって感じる事ができた。さらに研修会を通じて言語と文化の関係に対して新たな認識をもつことができた。

研修会では、日本人の生活と密接に関わる文化の紹介も行われた。例えば、日本人の食習慣や風呂文化などが取り上げられた。また、文化を取り入れた授業の紹介もあった。私は研修会で学んだ知識を参考にしたり、関連する資料を読んだり、さらに教室での実践を通して、「日本人とお風呂」という授業案を作成し、国際文化フォーラムが開催していた「第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」に応募した。そして、入賞することができた。このことは私にとって励みになり、教師

としての自信となった。それと同時に言語と文化の関係に対してより深く理解することとなった。

1998年に開催された第3回の研修会では、私は客員講師として、コンテストに応募した授業案の模擬授業を行った。参加者から貴重な意見と提案があり、さらに当時の授業方法について真摯な意見交換と討議が行われた。そして、文化が言語教育の中でプラスの役割を果たすという認識で一致した。

研修会に参加して、他校の日本語教師と多く知り合い、経験したことや情報を交換することができた。日本人講師には、私が普段教えるなかで生じた日本語に関する疑問や問題点について教えてもらった。当時私の学校には外国人教師が在籍しておらず、外部との交流もほとんどない状況だった。そのため、こうした経験は私にとっては、家の窓を開け外の世界を見たようなものであり、自分自身を理解することにもなった。

研修会のことを思い出すと、感動を覚えずにはいられない。こうした得がたい研修経験は再び私に自信をもたらし、言語教育において文化が果たす役割を再び認識させてくれた。現在、国際交流が日増しに盛んになり、異なる文化や異なる生活背景をもった人々が交流する機会が増えている。異文化を理解し、摩擦を減らすことは外国語学習者にとって非常に重要なことである。言語教育に文化を取り入れる必然性はより大きくなってきており、7年前に現在の言語教育の重要課題に触れることができたのは幸運だったと思っている。

劉淑艷(吉林大学非専攻外国語教育研究センター)

(TJFで翻訳、編集しました)

士が現在に至るまで連絡し合い、情報を交換したり、教材や資料を交換したり、互いに授業見学をしたりしている。連絡を取り合っている相手は省外よりも省内、市外よりも市内が多く、そして長く維持されていることから、地域に根ざしたネットワークを形成することが有効だといえる。

一方、電子メールを駆使して、他省の教師ないし日本人講師と交流が続いている人もおり、メールを活用した交流に前向きの人が多い。今後のネットワークの形成や促進、情報提供に、電子メールやインターネットも有効であろう。

(5) それぞれの出会いと学び

TJFは研修会を文化交流事業の一環として捉え、そこでの人と人の出会いを特に大切にしてきた。研修生、講師、中国在住日本人、日本の高校中国語教師、事務局スタッフ、日中関係者がさまざまな場面での交流を通して相互理解を進めていけるよう努力してきた。

特に研修生と講師との出会いが研修会の軸であると考え、講師が初めて会う日本人であるという研修生が多いことを考慮して、講師の人選については最大の配慮をはらった。日本語教育の教師として、専門性もさることながら、この事業の趣旨に賛同してくれること、中国事情や中国語に通じていること、中国の人たちを理解し尊重すること、同じ日本語教師として対等に付き合えること、そういう要件を満たす方々を主任講師、副主任講師として依頼した。と同時に、その他の講師の方々にも、講師マニュアルによってこの事業の趣旨を十分に理解していただくように努めた。その効果は、アンケートで数多くの研修生が最も研修会で印象に残ったこととして講師との出会いを挙げていることから十分に証明されたといえよ

コミュニケーションには「文化」が不可欠

私は1998年にハルビン市で開催された研修会に初めて参加した。この研修会で、日本語教育に対する考え方は大きく変わった。それまでは日本語の文法だけを生徒に教えていた。日本の文化を取り入れながら日本語を教えることの重要性が分かっていた。しかし、研修会に参加してみて、文法的に正しい日本語と日本人が実際に話している日本語とは必ずしも同じでないこと、日本の文化に対する十分な理解がないと、上手に日本語を使っても、うまくコミュニケーションが図れないことなどが分かった。そして、日本人の習慣や考え方などを知らないと、本当の日本語を身につけることができないと思うようになった。研修会后、私は文化を取り入れながら日本語を勉強したり教えたりするようになった。

2000年に、私は内蒙古で開催された研修会に事務局のボランティアとしても一度参加する機会を得た。事務局のいろいろな仕事をやりながら、時間のあいているときは講義を聴くことができた。この研修会では、前回とはまた異なる感想をもった。1998年は初めての参加

だったために、講師が話す日本語や講義内容を理解することで精一杯だったように思う。しかし、2回目の参加となった2000年は、少し余裕があったので、講師の教え方を観察することができた。2回目の研修会では、テキストのつくり方や教授法、日本人の話す習慣がもっとも強く印象に残った。特に、日本人講師が授業に取り入れたモデル会話はとても面白く感じたし、ロールプレイの課題のつくり方や、自然な日本語を生徒に使わせる教授法について学ぶことができた。今は研修会で学んだ教授法を自分の授業で活用している。生徒たちのほうも、そんなにノートを取らなくても楽にたくさんのことを吸収できるようになった。生徒たちは職員室に来たとき、「失礼します」「失礼しました」と言うようになった。また授業中、お互いに積極的に会話を練習するようになった。こうした生徒の成長を見るにつけ、ますます教える自信を強くもつようになった。

劉海峰(参加当時、通遼市カンチカ第二中学)

う。授業以外でも講師と研修生の交流会や茶話会を開いて、お互いにリラックスした雰囲気のなかで話してもらうようにした。こうした交流により双方の距離感が狭まり、毎回歓送宴は盛り上がりを見せた。

こうした講師陣を編成することができたのも、一貫して日本からの講師派遣の費用を負担し、中国赴任中の派遣専門家の参加を可能にしてくれた国際交流基金、および青年海外協力隊員を派遣してくれた国際協力機構という官のサポートがあったからで、官民一体の事業として成功したプロジェクトの一つではなかったかと思っている。

講師陣の編成にあたっては、講師間のチームワークや切磋琢磨が大切であると考え、ベテラン、中堅、若手の混合チームとした。実際をお願いしたすべての講師が、研修会の趣旨を理解し、持ち前のボランティア精神と情熱を傾けてくださった。また、若い講師は、ベテラン講師や研修生から多くのことを吸収したようだ。研修会で収穫を得たのは研修生ばかりではなかったといえる。多くの講師にとっても研修会は自己研鑽の場となったのである。

また、TJFとしては、中国の中等教育における日本語教育に協力するだけでなく、日本の中等教育における中国語教育も積極的に支援し、互いの言語を教える教師、学ぶ生徒の橋渡しをすることによって双方の言語教育を活性化させ、相互理解を促進することをめざした。その試みを第2回の研修会から始めたが、最終回の研修会で会期中に同じ会場で中国語教師研修会も併行して開催できたことは大きな成果だった。研修会後の日中教師セミナーでは、共通のテーマで議論することができた(40頁参照)。

中国の日本語教師とさまざまな日本人との出会いの場をつくるために、もう一つ努力したのは、各会場の近くに住む日本人駐在員との橋渡しであった。特に大連、瀋陽、ハルビンで行った交流会は盛況であったが、それを日常化するところまでもっていけなかったことは残念であった。

研修会で得たネットワーク

私は2000年に長春で開催された研修会に参加した。この研修会は、中日の教師の文化交流、学習、相互理解の場を提供してくれた。研修会では多くの日本の友人を得ることができた。彼らは博識で、親しみやすく、何よりも中国の文化を熟知し、尊重してくれていて、もっと早く知り合えていたらと思う人ばかりだった。そのため、研修は終始和やかで、統制と調和のとれた雰囲気の中で進められた。教える側、教えられる側双方が、中日文化の交流と融合について、そしてそれが言語に及ぼした影響について共に探求し、違いを認めつつ共感できることも多かった。この研修を通して、新しい知識、理念、考え方を得たこと、体験的に教授法が学べたことは、大きな収穫であった。

研修会での交流を通して得たことは、波及効果が大きく、私の一生の宝となるだろう。私は学校に帰ったあと、

研修会で学んだことや感じたことを、メールで同僚や他校の教師に伝えたり、意見交換したりしている。また、研修会で知り合った日本人講師の方々(例えば、中新井綾子先生、東京学芸大学の谷部弘子先生、大分の高校中国語教師田口理一先生など)とは、その後もメールや電話で交流を続け、日本語の研究や教育の中でぶつかった疑問や難問について相談している。先生方がいつもすぐに疑問を解いてくれるお陰で、私は先に進むことができる。

このように、研修会で始まった交流はさまざまな形でずっと続いており、中国の学校内、学校外における日本語教育の進歩と発展に寄与し続けている。

董賀(長春市第八中学)
(TJFで翻訳、編集しました)

講師から見た研修会



有馬淳一（ありま・じゅんいち）

2002年より現職。2002年夏に実施された第7回中国中高校日本語教師研修会の講師を務める。現在、中国各地で行われる日本語教師研修会やセミナーで中心的な役割を果たすかわら、日本語教師向けのウェブサイトの作成、メーリングリストの運営に当たり、日本語教師向けの広報、支援を行っている。

※1：吉林省教育学院と延辺教育学院の主催で、2003年3月に延吉市で開催されたコンクール。7名の中高校教師による模擬授業が行われ、その中から優秀教師が選ばれた。

■私が見た研修生のその後

❖有馬淳一（国際交流基金北京事務所日本語教育アドバイザー）

私が講師として初めて、この研修会に参加したのは、2002年8月の黒龍江省ハルビンでの研修会だった。それが最初で最後の機会だったため、私が現場の教師の皆さんと時間を共有し、この研修会のすばらしさを肌で感じることはできなかったのはごくわずかでしかない。

しかし、7回にわたって、吉林省、黒龍江省、遼寧省、内蒙古自治区の各地で行われ、延べ550人の中高校日本語教師が受講したこの研修会が残した成果は、今でもはっきりと感じることができる。

例えば、こんなことがあった。出張先で「十佳日本語教師授業コンクール」※1という模擬授業の発表会に参加したときのことだ。

ある教師が、模擬授業の冒頭、復習の活動として、既習語彙の「ビンゴゲーム」を取り入れていた。教室活動としてビンゴを紹介するのに、まず中国人教師たちにビンゴのやり方を理解してもらうのが一苦労だという話を以前日本人教師から聞いていたので、とても意外な感じがしてその様子を見ていた。

発表会後、校舎の出口で、ちょうどその“ビンゴの先生”と出くわしたので、「ビンゴ、おもしろかったですよ」と声をかけたところ、「去年の夏にハルビンで有馬先生に教わりました」と言われて驚いた。そして、そう言われてとてもうれしかったことを今でもよく覚えている。

国際文化フォーラムの「中国中高校日本語教師研修会」が一つの区切りをつけた後も、国際交流基金派遣の日本語教育専門家やジュニア専門家らが、現地の教育機関と協力する形で、現職教師を対象とした研修会を行っている。規模は小さいものの、一つの場所に参加者が集まって合宿型研修会を開くという形は、7回続いた“フォーラムの研修会”がモデルになっているといえるだろう。

私たちの研修会に参加した教師で、「1999年の延吉研修会に参加しました」「2001年の瀋陽の研修生でした」と自己紹介する人がときどきいる。もしかすると、この人たち、われわれの活動を“フォーラムの研修会”だと思っているんじゃないだろうかなどと嫉妬の気持ちも少々抱きつつ、中国の中高校の日本語教師たちが、“フォーラムの研修会”に参加できたことを誇りに思い、そこで学んだことを今もしっかり生かしてくれていることに大きな喜びを感じる。

講師から見た研修会



本田弘之（ほんだ・ひろゆき）

青年海外協力隊員として中国の大学で日本語を教え、その後、TJFの専門員、杏林大学大学院を経て、杏林大学教員となる。中国中高校日本語教師研修会の講師を初回から最終回まで務める。TJF発行の研修会用教材の作成に中心メンバーとして加わる。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』（TJF発行）のコーナー「日本語をみがこう」を執筆（1999～2004年）。

■私が実感した研修会の成果

❖本田弘之（杏林大学教授）

私は2002年春、黒龍江省のある朝鮮族中学に滞在していた。ある日、教室の外を通りがかった私は、その教室から洩れてくる声を聞いてうれしくなった。担当教師が、実に堂々と日本語による直接法で授業をしていたからである。

私は7回の研修会のすべてに参加する機会を得たが、はじめのうちは、参加者に「日本語教育」より「日本語」の研修を求める気持ちが強かった。参加者の関心は「授業で何を教えるか」に偏っていたのである。

しかし、研修会が回を重ねるにつれ、参加者の意識は変化していった。日本語そのものより、教室での授業技術に対する関心が高まっていった。「どのように教えるか」に興味をもちはじめたのである。

これについては、研修会を重ねたことの効果が大きかったと考えている。というのは、研修会実施4年目ぐらいから、各校の職員室で、研修会に参加した教師が、未参加教師より多くなったからである。参加者が自校に戻り、研修会について同僚と話をする場合、「講師がどのように授業を進めたか」というのが話題の中心になることが多い。そのことによって、「授業の方法・技術」を強く意識するようになったのではないかと思うのである。

さて、私は2002年度、黒龍江省教育学院にお世話になり、黒龍江省各地の中学に滞在する機会を得た。冒頭に述べた授業を聞いたのは、そのときである。この中学も7名の教師全員が研修会に参加した経験をもっており、先生方の「授業の方法・技術」に対する関心が非常に強かった。このように、7回の研修会は、日本語教師の教授力の向上に大きく貢献した。

しかし、実際に教育現場に身をおいてみると、まだまだ解決しなければならない問題は多い。例えば、研修会では「受験日本語教育」に対して批判的な空気があったが、「受験日本語」が、受験で不利になりがちな少数民族の教育や、貧困地区の進学率向上に多大な貢献をしているのが現実である^{※2}。それを軽視するのは、やや問題があった。また、現場では大人数のクラスや、学生の学習意欲に極端な差があるクラスがあり、先生方は多くの苦勞をしていたが、そうした教育環境を主催者側が十分に把握できていなかったところもある。

研修会が終了した今でも、まだ、考えなければならないこと、支援すべきことがなくなったわけではないのである。

※2：このことについては張石煥氏の原稿（100頁）に詳しい。

講師から見た研修会



山口敏幸(やまぐち・としゆき)

国際交流基金派遣の日本語教育専門家として北京赴任中に実施された第1回中国中高校日本語教師研修会から計4回講師を務める。TJF発行の研修会用教材の作成に中心メンバーとして加わる。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)のコーナー「教授法を学ぼう」を執筆(2003～2004年)。2001年に国際交流基金から香港総領事館に派遣され、香港の日本語教育に携わる。

■交流促進を実感

❖山口敏幸(元国際交流基金派遣専門家)

私は、この研修会に講師として4回参加したが、今振り返ってみると、大変密度の濃い、熱い時間を過ごさせていただいたという印象をもっている。

研修会には、毎回、各地から中高校の日本語教師が夏休み返上で集まってきたが、皆一様に研修会に対して大きな期待を寄せていた。研修会に対して期待度が高いということは、裏を返せば、現場で教えるのに大変苦労しているということで、そうした気持ちに何としても応えなければと身が引き締まる思いだったのをよく覚えている。

スケジュール上は2週間という短い期間でありながら、その中にぎっしりと詰め込まれたカリキュラムは、講義がすべて日本語で行われるということもあって、参加した研修生にとっては大変辛く、厳しいものであったと思う。しかし、ほとんどの人が脱落せず、最後まで研修を受けたということは、研修内容がその当時の先生方のニーズに合っていたということと、主催者の周到な準備と運営があったこと、そして、何より、研修生の教育に対する熱意に、日中双方の講師、スタッフが熱意で応えたからだろうと思う。

そうした熱意のもとで進められた研修会は、当然ながら日中双方の関係者に一体感をもたらし、講義の時間以外でも交流が進むことになった。閉講式が終わった後のパーティの盛り上がりと涙の別れは、まさに研修を通して心の交流があった証だろう。

研修会に集まった研修生は、それまで一度も日本人と会ったことのない人が多く、歴史的な背景から、たとえ自ら戦争を経験していなくとも、語り継がれた話から、日本人は怖いという先入観をもっていた人もいたようだ。また、彼らの教育のスタイルが、教師は威厳をもって生徒に一方的に知識を伝授するというようなものであったため、研修生という「伝授される」立場になったことによって、特に日本側講師に対してはさらに怖さを増幅させていたようだった。

しかし、研修会が進み、日本人講師、スタッフとの交流が進むにつれて、彼らの日本人に対するステレオタイプな印象は大きく変わっていき、教師は威厳をもって生徒に知識を伝授すべきだという古い教育観を見直す気持ちも生まれたようだ。研修生が研修を通して、それまで日本人に対してもっていたステレオタイプな観念や古い教育観を変えるきっかけになったとすれば、この研修会は日中文化交流の促進という点でも、大きな成果を上げたことになるだろうと確信している。

講師から見た研修会

■私が得たもの

❖杉山充（元青年海外協力隊日本語教師隊員）



杉山充（すぎやま・みつる）

青年海外協力隊日本語教師隊員として中国の高校に赴任。最終回の中国中高校日本語教師研修会の講師を務める。帰国後大学院に進学して、日本語教育の研究に従事するかたわら、TJFが2004年に実施した第1回全中国小学校日本語教師研修会の講師を務める。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』（TJF発行）の「『素質教育』をめざした授業づくり」を執筆中。

私が初めて講師として参加したのは、2002年にハルビンで開催された研修会であった。当時私は青年海外協力隊員として大連市第一中学に派遣されていた。赴任校では高校生の日本語指導に携わっていたが、現場経験の浅い私にとっては毎日が試行錯誤の繰り返しであった。そんなときに本研修会に参加したことは、その後の協力隊活動を進めるうえで大きな転換点となった。

研修会期中は、聴解とコミュニケーション表現の授業を担当した。聴解授業に先立ち、国際交流基金日本語教育アドバイザーの有馬淳一先生から聴解授業における教室活動プランやタスクの組み立て方に関する説明を受けた。また、実際に授業を見学していただきアドバイスを受けることもできた。コミュニケーション表現の授業では国際交流基金青年日本語教師の稲田登志子先生とチームティーチングを行った。準備の段階では授業の流れやロールカード作成などについて、また授業後はその日の反省点や改善点について意見交換を行った。空き時間を利用して他の講師の授業を見学することもできた。このように自分の授業を専門家に見学してもらったり、逆に他の先生の授業を見学したり、あるいは授業に関して意見交換したりする機会は、普段日本人一人という環境にいる私にとっては、自分の授業を内省したり新たなアイデアを得る絶好の場となった。

さらに、講師間の人脈を築けたことも、その後の協力隊員としての活動の幅を広げることとなった。2003年冬に青年海外協力隊が中心となって大連市の中高校日本語教師のために行った研修会では、課程教材研究所の唐磊先生と大船ちさと先生（研修会講師経験者）に依頼し、特別講義を担当していただいた。また、青年日本語教師の稲田先生、中新井綾子先生にも講師として参加していただき、研修カリキュラム作成の段階から貴重なアドバイスをいただいた。赴任校で普段の授業を進めるうえで必要な作文指導法などに関して、杏林大学の本田弘之先生からアドバイスをいただくことができた。大連市で月一度行っていた教研活動（教育研究活動の略）についても、有馬淳一先生から活動内容に関してさまざまな助言をいただいた。ハルビンでの研修会に参加していなければこのような方々と知り合うことはなかったであろう。

今振り返ると、私はハルビンの研修会に講師として参加したのであるが、同時に研修生と同じように教授法に関して多くのことを学び、また講師間のネットワークを広げることができた。そのお陰で協力隊活動もより充実したものになり、中国の中等日本語教育の発展にわずかながらでも寄与できたと信じている。

（文中の所属、肩書きは当時のもの）

講師から見た研修会



谷部弘子(やべ・ひろこ)

1980年代から中国の日本語教育に携わり、2000年から3回にわたって中国中高校日本語教師研修会の講師を務める。現在、ことばの男女差に関する研究、中国の大学日本語学習者のための教材開発に関する研究などに従事。

■研修の成果を性急に求めてはいけない

❖谷部弘子(東京学芸大学教授)

研修会期間中はともすると、意欲的で柔軟な若手教師vs頭の固いベテラン教師という構図ができてしまうのだが、両者に同じ目標を設定することに無理があるのではないかなと思う。今の私に若手講師と同じことを求められても太刀打ちできないであろうし、逆にこの年齢になった私のよさは若手講師には発揮できないのではないかなと思うのだ。

同じことが研修生に対してもいえるのではないだろうか。年配の研修生の中には、「コミュニケーション活動もゲームもおもしろいけれど、毎回はできないな」という気分もあるのではないだろうか。例えば、私自身、学習者の発話を引き出すような授業をするには、若いときと違い意識的に気分を高揚させないとできなくなってきた。ましてや、中高校の中堅教師として果たすべき役割は、日本語を教える以外に多々あるはずだから。より良い授業をするためには、教師自身の内的な「気づき」、変化が必要である。しかし、その「気づき」を誰もが行動に移せるわけではない。研修の成果を、どの研修生にも一様に性急に求めてはいけないと思う。

(研修会後のレポートをTJFで編集しました)



中新井綾子(なかあらい・あやこ)

青年海外協力隊日本語教師隊員、国際交流基金派遣ジュニア専門家(派遣当時：青年日本語教師)として中国の中高校日本語教育に携わる。赴任中に実施された中国中高校日本語教師研修会の講師を、1999年より3回にわたって務める。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)に寄稿。2003年から、課程教材研究所で、中国の中高校日本語教科書の制作に関わる。

■さまざまな形の「自ら学ぶ場」を

❖中新井綾子(元青年日本語教師)

私はこの研修会で、多くの教師に出会った。今でもその時の様子が思い浮かぶ。2週間という長くて短い研修会が始まった直後は、研修生の緊張した顔が並んでいる。もちろん、私も相当緊張している。それが2週間たつと、顔が緩んでいって、最後には涙を流して別れる場面となる。

青年日本語教師だった2年間は、吉林省内の学校を回ったり、セミナーを開いたりしたが、行く先々で研修会で出会った教師に再会したり、逆にセミナーで出会った教師に研修会で再会したり、まるで研修会が人と人をつないでいるかのようだった。また、あちこちで「私は×年の研修会に出ました」「〇〇先生(講師の名前)を知っていますか」と合言葉のように言われた。その一方で、研修会のことをまったく知らない教師もいた。地方にあって情報を入手しにくい学校の教師だ。そのような地域で、教育学院がセミナーを開いたときの教師の真剣な眼差しは忘れることができない。

日本語教師がおかれている状況は、地域差、学校差、個人差が非常に大きい。それらの「差」にきめ細かく対応した研究会やセミナーなどを継続的に開いていくことが大切だと思う。また、そうした研究会やセミナーは「誰かから教えてもらう場」ではなく「自ら学ぶ場」とあるという認識をもって参加することが大切だと感じている。

講師の声：さまざまな交流、学びの場

●教育のあり方について考えた

教研員はじめ研修生の方々が、「日本人の先生方から、教育がどうあるべきかを学んだ」「今後は、詰め込み教育をやめて、生徒が楽しく学べるような教育をやりたい」とおっしゃったことには、逆にこちらが教えられました。単に日本語教育の問題だけでなく、教育というもののあり方について考えてもらうという意義も研修会にあったのではないのでしょうか。

(2001、内蒙古自治区通遼会場)

●中国側の熱意と日本側の思い

研修会成功の第一の要因は、中国側の熱意。そして、研修生の切実な思いを講師陣が重く受け止めたこと。また講師の中国や中国人に対する深い思い。TJFスタッフの働き。さらに、若い講師たちの体当たりの授業。若い講師は、中国語を理解し、中国の生活に順応している人たちだったので、はじめからスムーズに授業ができたように思います。これは、現地の事情を理解し、いっしょに仕事をするという姿勢ができていたということです。このような研修会のありようとして重要なことだと思います。

(2001、内蒙古自治区通遼会場)

●若い講師に刺激を受けた

研修日程を組んでいたとき、私は「もっと若い先生方に活躍していただいたら」という意見を出したのですが、これは正解でした。いろいろな授業を見学させてもらい、大変いい刺激を受けました。ある若手講師から授業案をもらいましたが、そこには教育実習さながらに、時間配分や手順が細かく書かれていました。1時間の授業のために毎回かなりの時間をかけていたのでしょう。これはほかの若手講師も同じだったにちがいありません。こうした姿勢に、私は素直に敬意を表したいと思います。

(2000、吉林省長春会場)

●講師間の信頼関係が重要だ

中国側との信頼関係だけでなく、日本側内部でのスタッフと講師の間、ベテラン講師と意欲的な新人講師との間の信頼関係が研修会を成功させる大事な要素なのだと強く感じました。

(2000、黒龍江省ハルビン会場)

●自分を見つめることができた

この研修会に関わる中で得たものはたくさんあります。その一つは、研修生や講師陣との付き合いを通して「個性を見つめる」ことができたということです。実際、連続20日間ほぼ毎日三食一緒にし仕事をする、つまり起きてから寝るまで集団で生活する、こういった多くの時間を共有すると、個々人の良さや短所が非常によく見えてきます。そして、それ以上に客観的に自分の姿、己を見ることができました。普段の生活ではなかなか

できない、自分というものを客観化、相対化させて観察することができたのです。そして、はっきり分かった(再認識した)ことは、「自分は人間が好きなんだ」ということです。

(2002、黒龍江省ハルビン合同会場)

●多くの先生と出会った

熱心な中国人の日本語の先生たちに会えたことは幸せなことでした。また、主任講師の先生をはじめ、大勢の先生方と出会ったこと、特に若い方たちと話せたことを嬉しく思いました。

(2001、吉林省長春会場)

●自分自身が多くのことを得た

今回の研修会は、何よりも自分自身にとって得ることの多いものでした。吉林省の各地で日本語を教えている先生方にお会いできて、自分が関わった1年間では分らなかった中国の中等教育の現状を垣間見ることができました。例えば、一クラスの人数が多いことや、適当な教材がないという教育環境、またカリキュラムについても先生方と話ができました。今後自分自身がどう関わっていくか、改めて考えるいい機会になりました。また、研修生の熱心さにも脱帽しました。教師歴10年、20年のベテランでありながら、私たちの授業にも真剣に耳を傾けてくださり、少しでも自分自身のレベルを向上させようと努力されている姿勢に感動しました。

(2001、吉林省長春会場)

●研修生の熱意に感動した

研修生一人ひとりが本当に熱心で、頭の下がる思いでした。「このチャンスにしっかり勉強しよう」という気迫が伝わってきて、こちらも熱が入りました。

(2000、遼寧省大連会場)

●講師の熱意を感じた

研修前の講師を対象にしたオリエンテーションで、短期間でいかに成果を上げるかということを講師の方々が真剣に考えておられることがひしひしと伝わり、大変プレッシャーを感じました。しかし、同時にこういうメンバーに加えていただいたことに喜びを感じました。

(2000、内蒙古自治区フフホト会場)

●いろいろなことについて考え直すことができた

いろいろなことを考え直すきっかけになりました。また新たな気持ちでがんばろうという気持ちもわいてきました。いろいろな先生との話からいろいろな刺激を受けたこと、問題にぶつかることに、すぐ話ができて相談できる人が何人もいたことが大きかったと思います。

(2002、黒龍江省ハルビン合同会場)

(研修会後のレポートから抜粋、編集しました)

教員から見た研修会



■教師間の交流と行政関与の促進

◆張石煥(黒龍江省教育学院日本語教員)

国際文化フォーラムおよび国際交流基金など関係機関の支援のもと実施した7回の教師研修会で以下に述べる四つの大きな成果を収めた。

まず、日本語力が向上したことである。日本語教師の多くは日本語を専門としておらず、途中から日本語教師に鞍替えした人も少なくない。したがって、教師たちの日本語力は高いとはいえないものだった。しかし、この研修を受けたことで、口頭表現、文法、教授法などの面でのレベルアップは顕著である。

次に、自信がついたことである。日本語教師たちは日本人から教わったこともなければ、日本人が話す日本語を聞いたこともない教師が多い。そのため、自分の日本語力に自信がなく、日本語を話す勇気もなかった。しかし、研修会で勉強したり交流したりすることを通じて、教師たちは日本語を話す自信をもち、勇気もわいたようだ。そのお陰で、教師たちに対する校長の信頼が高まり、保護者たちも日本の専門家に直に教わった教師たちに安心感を覚えるようになった。

三つめは、学校間の交流が促進されたことである。黒龍江省は中国の辺縁地域にあって、面積が広く、学校同士はかなり離れている。特に日本語を開講する学校の多くは、さらに奥地に点在しているため、交流はほとんどなく、閉鎖的な状況に置かれてきた。7回の研修会は、これらの学校の教師が集まり、情報交換、交流をするまたとない機会となった。

最後に、いい教材と参考書を得たことである。7年にわたる研修会ごとに、主催者から研修生とその学校に貴重な教材・参考書が贈られた。教師と学校にとって長年の教材・参考書の不足が緩和された。このように、この研修会は、その注目度、対象範囲の広さ、効果の大きさなど、どの面からいっても、これまでになかった研修会である。

国際文化フォーラムはこの研修会をスムーズに運営できるように、政府の外事部門、教育行政部門の関係者とたびたび直接接触し、その結果、研修会はこれらの関係部門から強力なサポートを得ることができた。会期中、国際文化フォーラムから派遣された担当職員は、教材や資料などを準備するなど、講師のサポート役を務めた。担当職員が過労で倒れたときには、われわれ中国側スタッフは大きなショックを受けた。研修会に関わった講師たちも、中国の日本語教育の発展のために心血を注いでくれた。苦労も多かったであろう。その講義のすばらしかったことはいまでもないが、ここで逐一紹介するのは割愛する。こうした方々の協力と支援があったからこそ、日本語教育が全国規模で急激に衰退しているなかであっても、黒龍江省の日本語教育は、依然安定した発展を続けているのである。

教員から見た研修会



■生きた言語を学び、交流を深める

❖曾麗雲（遼寧省基礎教育研究教師研修センター日本語教員）

7回の研修を通して中高校の日本語教師の日本語力、日本語教授力、授業運びなどすべての面で明らかに向上が見られた。今では日本語教師たちは日本人に会うことを怖がらず、あらゆるチャンスを捉えて日本人と接触し交流しようとしている。これは、研修会で授業を担当した講師が国際文化フォーラムによって慎重に人選され、中国の日本語教育に対して熱意と愛情と強い責任感をもつ優秀な講師ばかりであったからだ。これらの講師が担当した授業では、中国の国情や中国の日本語教育に対する理解が十分に発揮され、それぞれの能力と教材も十分に生かされた。

これまでの研修内容を見ると、カリキュラムデザインは知識伝授型で受験対策教育を主にするスタイルから、教師自身の日本語力の向上、日本語教授力の向上をめざすスタイルへと絶えず変化してきたことが分かる。研修を受けた日本語教師の教育理念や考え方においてそれぞれ一定程度的変化が見られた。研修を行う前は、日本語の授業は基本的に中国語で行われ、日本語を耳にすることはほとんどなかった。また、授業の中心はこの文法をどのように説明するか、その空欄をどのように埋めるかなどというものであり、教師も生徒も文法学習を重要視していた。そして、日本語の発音やアクセント、日本語を使ったコミュニケーションなどを軽視していた。そのため生徒は、何年日本語を学んでもほとんど聞き取れず、話すことができなかった。俗に言う「口の利けない日本語」になっていた。研修会の開催や新しい「課程標準」の制定に伴い、日本語教師は新しい教育理念を取り入れるようになり、自ら研修会で学んだことを積極的に自分の授業の中で実践していった。教室では、生徒は教師が授業中に使う日本語を耳にするようになっただけでなく、先を争うように日本語を使って自分の考えや気持ちを表現するようになった。このようなさまざまな理由から研修会の成果は大きかったといえる。

また、研修会を通して、日本語教師は日本人講師から生きた日本語の知識や指導技術を学んだだけでなく、普段、本からは知りえない「言語の文化背景」も深く知ることができた。また、日本人講師の勤勉な精神や授業で手を抜かない態度も学んだ。

さらに、研修会は、漢族の学校、蒙古族の学校、朝鮮族の学校がお互いに交流する良い機会となった。各民族学校の教育理念や教育方法はそれぞれ異なるが、お互いに長所を取り入れ、短所を補うことができた。研修会は中国の日本語教師に日本人講師と交流する機会を提供しただけでなく、中国の日本語教師に自己実現の場を提供してくれた。日本語教師たちはこのような研修会が継続して開催されることを望んでいる。

教員から見た研修会



■研修生の意識変化を促す

❖尹勝傑(吉林省教育学院日本語教員)

7回の研修会を通して、吉林省では100人あまりの教師が研修を受け、その後、日本語教育の現場で活躍している。研修会は研修生の日本語レベルを高めただけでなく、視野を広げ、彼らの意識に新しい変化をもたらした。私はこれがもっとも大きな収穫の一つであったと考えている。

研修生たちは現在、各学校の日本語指導の中心的存在であり、他の教師の手本となっている。多くの研修生が研修会のことを思い起こすたびに感慨を新たに、担当講師に傾倒している。私はたびたび教師たちから「いつまた同じような研修会が開催されるのですか」という質問を受ける。まだ研修会に参加したことのない教師の願いはもっと強い。

研修会が中国中高校日本語教育に及ぼした影響は、その多面性からいっても、またその深さからいっても極めて大きい。これは決して言い過ぎではない。我々は国際文化フォーラムおよび関係機関に心から感謝している。そして、今後も何らかの形で協力が得られることを期待するものである。



■日本人に教わって、日本語力が向上

❖陳弘法(元内蒙古自治区教育厅外国語教員)

2000年夏と2001年夏に、それぞれフフホト(内蒙古教育基金会中日友好日語研修センター)と通遼(カンチカ第二中学)で中高校日本語教師研修会が開催され、計46名が参加した。日本人講師が教鞭を執り、研修期間は約2週間。1999年までの研修会参加者をあわせると、自治区内の日本語教師ほぼ全員が研修を受けた。これらの研修会は自治区の中高校日本語教師に大変役立った。それまで大部分の教師は日本人に会う機会もなく、直接教わる機会はおさらなかった。研修を通して、教師たちは聴解、発音、特に会話能力の面で大きな進歩を遂げた。日本文化の理解や日本語教授法の面でも大きくレベルアップした。

カンチカ第二中学の劉海峰先生の会話能力が驚くほどの勢いで高まったのも(今ではカンチカを離れて別の都市で活躍しているが)、数回の研修会に参加したことによる。同じ学校で教えているもうひとりの最年少教師、張敬岩先生も研修会に参加したお陰で、今全国の日本語教師の中でちょっとした有名人になっている。2004年、人民教育出版社が中学『日語』を使った4コマの模擬授業が収められたCDを制作した。そのうち1コマが張敬岩先生によるものである。張敬岩先生が将来どの学校で教えようと、彼女の進歩は研修会に始まり、研修会が彼女を大きくしたことは間違いない。

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

次世代への外国語教育にかける夢

本プロジェクトの基礎を築いたのは、日本側ではTJF事務局長(当時)の牛島通彦氏だった。持ち前のエネルギーあふれる行動力と熱意で中国側の信頼を得ていった。第3回以降、本プロジェクトの定着と発展期に事務局長だったのは高崎孝氏だった。大学で中国語を専攻し中国事情に通じていた強みを存分に発揮した。ご兩人ともお酒が減法強かったことは、中国で仕事をするのに大いに役立った。私は両局長の下で全7回の研修会の企画・運営にあたった。

今でも忘れられないのは、1995年に牛島氏とともに研修会の事前調査のため北京に赴いた時のことである。後に研修会の共催相手となった中国側の日本語教育関係者と熱い議論を交わした。日本側は調査にばかり来て中高校のために何もしないではないかと言われた。胸に響いた。たとえ小さな研修会であっても必ずやると約束した。それから7年後、研修会の幕を下ろす任を負ってハルビン入りした。どこまで使命を果たすことができたかわからないが、北京での約束は何とか守れたと思う。

この大プロジェクトをやり通すことができたのは、紛れもなく最前線で細かい調整や手間隙かかる作業を、黙々と、あるいは紅潮した面持ちでこなしてくれたスタッフのお陰である。毎年研修会の舞台裏では涙ぐましい奮闘劇が繰り広げられたが、それだからこそ研修会は各人の脳裏に深く刻まれ、大きな仕事を成し遂げた後の充実感が味わえたともいえる。毎回研修会最終日の夜に行われた歓送宴では、研修生全員とともに歌い踊り別れの涙を流すのが常だった。

7年間、私が日中の日本語教育関係者とともに共有したかったのは、日本語教育を豊かなものにする事だった。「日本語を教える」という日本語教育から、「教育としての外国語(日本語)」の可能性を追求すること、すなわち未知の外国語を学ぶことで、人生で出会える人の輪が広がり、自他を含む人間理解が深まることの素晴らしさを共感したいと思ってきた。そして、その仕事は日中で今も続いている。 中野佳代子

「中国」のなかの「朝鮮」

「環日本海諸国図」という地図がある。私たちが見慣れている地図は、南北に長い日本列島の西に朝鮮半島があり、さらに西に中国大陆がある。天気予報でおなじみの地図とは違って、「環日本海諸国図」は方位が逆転している。日本列島弧が上にあって、朝鮮半島が下から突き出ているように見える。

日本で「日本海」と呼ばれている海が、韓国や北朝鮮で「東海(トンヘ)」になることを知ったのは、高校3年のときだった。そのときの衝撃が、TJFで韓国朝鮮語(以下、韓語)教育の事業を展開する原動力になっていると思う。

1996年後半から1997年8月まで、私はTJFで中国の日本語教師研修事業を担当した。併行して、日本の高等学校の韓語教育の調査事業に着手していた。第2回研修会を半年後に控えた1996年12月、極寒の中国東北部に出張した。北京を皮切りに、大連、瀋陽、延吉を回り、北京に戻った。北京以外は初めての訪問である。

中国東北部は歴史的に日本と関係の深い渤海(698～926年)の故地であり、旧満州の地である。そこで日本語を教えている教師の研修事業を軌道に乗せるための出張であり、日本語教育の現状調査を東北三省の教研員に委託する準備作業を兼ねていた。

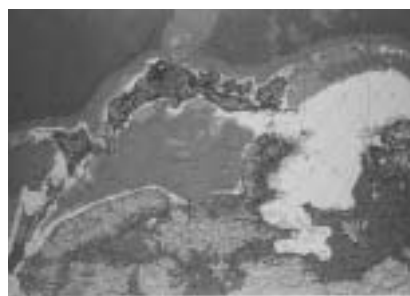
北京から張国強さんと一緒に大連に向かった。吉林省、遼寧省、黒龍江省の日本語教研員4名が、長春、瀋陽、ハルビンから大連に集まった。大連市教育学院で第2回研修会の打ち合わせと現状調査事業について協議するためだった。大連の日本語教研員を加えて5名の教研員のうち3名が漢族、2名が朝鮮族だった。中国語がほとんどできない私は、朝鮮族の人とは韓語で会話をした。20年以上も使う機会がなく、さび付いてしまった言葉の感覚を、彼らと話しながら少しずつ取り戻していった。

■韓語という「中国語」

「中国語」は広い意味では、ポルトンファ(共通語)、広東語、上海語などの「漢語」のほか、韓語やチベット語、モンゴル語を含む言葉である。その意味で私は韓語という「中国語」を話したことになる。朝鮮族の日本語教師たちは「中国語」の漢語と韓語のほかに日本語を話す。

瀋陽から延吉には飛行機で行った。瀋陽空港のカウンターからは、漢語より韓語の方が耳に入るようになった。飛行機の機内放送も韓語と漢語だったと思う。乗客の多くは朝鮮族の人たちだったようだ。延吉空港は闇夜に沈んでいた。その暗さが北朝鮮を思わせた。

空港から延吉の市街まで、車窓の光景は暗く沈んでいた。電力事情が悪かったのだ。赤や黄色のネオンがぼんやり浮かぶ町並みは、1973年12月に私が初めて訪ねたソウルにどこか似ていた。ここは「朝鮮」なのと思った。実際、朝鮮族には咸鏡北道(ハムギョンブクト、北朝鮮東北部の中朝国境と日本海に挟まれた地域)出身者が多い。



環日本海諸国図(富山県企画、日本地図センター作製、1994年)

延吉の人たちにも韓語が通じた。私の韓語は南朝鮮訛りだと言われ、あなたたちののは北朝鮮訛りだと言いつつ笑い合った。そのやり取りのなかで、韓語の生命力の強さを確

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

認していたのだ。

日本語教師研修会の参加者の約半数が朝鮮族である。それを踏まえて、1997年から研修生の母語別に発音教材を作るようになった。画期的なことだった。

「環日本海諸国図」は朝鮮半島から見た日本列島の地図であるとともに、中国の東北部から列島弧を見た地図でもある。それはまた朝鮮族の人々が日本を見る視点でもある。

小栗章

研修会で築いたネットワーク

1998年の第3回研修会を除いて、1996年から2002年まで、6回の研修会に事務局として関わった。どれにも思い出があるが、中でも1999年に吉林省の延辺教育学院で行われた第4回研修会がもっとも印象に残っている。1999年は、三省合同開催だった研修会が省別開催になったこと、それまで研修会の期間中に行われていた、日本からのゲストが担当する文化体験講座や特別講演などのイベントがなくなり、講師、研修生、日中事務局が2週間合宿生活をするという、極めてシンプルな研修会がスタートした年だった。それまで2回の研修会で、一通りの異文化衝突を経験し、中国側とのコミュニケーションもある程度とれるようになってはいたものの、事務局に常駐するTJFスタッフが一会場にひとりとなり、少々不安を抱えながら日本を離れたことを覚えている。

■最高のチームワーク

北京空港で中国在住の講師3人と合流するはずが、離陸時間になってもひとりが現れず、そのまま北京空港を飛び立った。延吉の空港に着くと、直前に降った大雨で街のあちこちが冠水、おまけに落雷による停電で、講師を歓迎するために開かれた夕食会は、キャンドルディナーとなった。その最中に、遅れた講師がやっと到着。さんざんなスタートに、この先どんなことがあるのだろうという不安が募った。しかし、そんな不安を吹き飛ばし、研修会を乗り切るものにしてくれたのは、講師のチームワークと機動力だった。

研修会の講師陣は、そのためにつくられた即席チームであるため、会場で初めて顔を合わせる人たちもいた。それ

ぞれ専門家として日本語教育に携わっているものの、教師を対象にするのは初めて、しかも短期間で成果をあげなければならないという重い責任を担っている。自分の担当する授業をこなしていくだけでも大変である上に、講師間に意見の食い違いがあれば、主任講師と事務局には、その調整という大きな仕事が入り込んでくる。ところが延吉会場の6人の講師たちは、そのとき初めて一緒に仕事をするとはいえないくらいのチームワークで、次から次へと研修内容を充実させるための提案を出し、実行に移していった。

コミュニケーション表現の授業では、自然な日本語をわかってもらうためには会話例を録音したテープがあったほうが良いと誰かが言い出せば、事務局の部屋やホテルの一室が録音スタジオになり、講師たちがひとり何役もこなすにわか劇団が結成された。ロールプレイにリアリティを出すために、手作りの映画チケットやスケジュール表も作った。また、教師と学生という関係でなく、対等なコミュニケーションをとることが必要だろうということで提案されたのが「茶話会」だった。お菓子をつまみながらのおしゃべりは、講師と研修生の距離感を一気に縮めた。延吉会場でのこうした工夫は、いずれもその後の研修会で取り入れられるようになった。

「チームワークは力なり」。延吉の研修会では、身をもってそのことを体験できたし、そのチームの一員として仕事できたことを幸せに思う。

■教員や研修生たちとのネットワークを活用して

また、研修会で築いた教員や研修生たちとのネットワークは、私にとって大きな財産となった。私は今、日本の高校における中国語教育事業を担当している。研修会でも、日本の高校の中国語教師と中国の高校の日本語教師を校にした友好クラス交流の橋渡しをしてきたが、そのほかにも中国語の授業に役立つ素材や教材の提供、中国語を話す人々との交流の機会をつくることにも取り組んでいる。このときに、頼りになるのが教員や研修生だ。

TJFは2004年、ホームページに中国の高校生生活を紹介するTJF Photo Databank中国編を立ち上げ、現在1500枚の写真を掲載している。写真を増やすために、現在、5校に撮影協力を依頼しているが、そのうち3校は、研修生のいる学校だ。教員が校長に協力を依頼してくれ、研修生が実際の撮影を担当してくれている。



第1回研修会で事務局の仕事を手伝ってくれた長春外国語学校の生徒たちと



第2回研修会準備のための事前出張で中国側関係者と打ち合わせ



第3回研修会会期中の休息日に松花江下りをした船上で教員、研修生たちと

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

また、TJF は複数の高校生訪中プログラムに関わっているが、プログラムで重要な位置を占めるのが、現地の高校生との交流だ。つい最近も、新しい交流校を探すため、長春の二つの学校を訪問した。いずれも研修生がいる学校だ。

7回の研修会に参加した523人もの研修生が各地にいる。今後日本の高校中国語教育事業を進めていく上で、こんなに心強いことはない。 水口景子

「ぶつかりあい」を経て

1回目から4回目まで、研修会に関わった4年間は、自分とは違う社会の仕組みのなかで生きる人たちと、文字通りがっばり四つに組んで研修会をつくりあげていった濃密な日々だった。中国側のスタッフはとても頼りになる存在で、物心ともに支えられ助けられたことは数えきれないほどあり、一人ひとりの顔を、感謝の気持ちとともに思い出す。とはいえ、きれいごとだけではすまなかった。2週間という限られた研修期間のなかで毎日の研修を円滑に進めていくために、「使用予定の機材が教室にない!」「予定していた研修生や発表者が来ない!」「教材が届かない!」「食中毒がおきた!」「洪水が起きた!」など、退屈している暇がないくらいにおそいかかってくる突発事項に待たないで対応しなければならなかったのである。日本側と中国側、事務局と講師、主催者と研修参加者のあいだで意見や要望の食い違いがあっても、「ま、ま、とりあえず少し冷却期間をおいて客観的に考えてみましょう!」などと優雅なことを言っている時間はなく、「わいのわいの、ぎゃあぎゃあ」言いながらも何とか折り合いをつけ前進していく日々だった。当然、常に冷静さをよそおい、クールに仕事をこなすなんてカッコいいことをやっている余裕はなく、みな自分の豊かな人間性(?)を大いに発揮しながら仕事をしていた。もちろん遠慮もあったが、基本的にはお互いに言いたいことを腹にためず、口(や態度)に出しながら仕事をするという、なかなか得がたい経験をさせてもらったと思う。

■衝突と歩み寄り

今思うと、とくに初期の頃は、「とにかく実務に徹したい」日本側事務局スタッフと「日本からのお客様をきちんともて

なしたい」中国側事務局スタッフが考え方の違いでぶつかることがよくあった。「お客様」とは、講師や私たち日本側スタッフのことである。

その一つが、「宴会問題」。講師やスタッフが途中で合流するたびに、全講師、全スタッフが参加して歓迎の宴会が開かれた。しかも、今日は中国側事務局、明日は教育委員会などと、ホストを替えて毎晩のように宴会が繰り返されるのである。これには、講師からクレームが続出。「日々の授業の準備もあるし、長丁場なので体調管理も大切。もっと宴会をセーブしてくれ!」という切実な要望だった。私たちも、「研修会の主役は研修生。かれらが充実した研修を受けられるようにするのがいちばん大事!」という気持ちから、「講師も私たち事務局スタッフも、夜は明日の準備をしたいので、宴会には出たくない」とはっきり言ってしまう、少し険悪な雰囲気になってしまったこともある。しかし、中国側にしてみれば、せっかく日本から来てくれた人たちに快適に過ごしてほしいし、自分たちだって疲れているけれど最大限のもてなしの気持ちを表したいという思いがあったのだ。それを否定したのだから、せっかくの好意や誠意を受けとめてもらえないという気持ちになったのも当然だろう。この問題は何度かおこったが、そのたびに多少険悪なムードに陥りつつもやり取りを重ね、宴会の数をセーブしていった。私たちも、中国側の配慮や立場を理解し、設定される宴会にはなるべく気持ちよく参加するよう心がけた。

宴会に限らず、こちらのやり方を一方的に押しつけてしまったのではないかと思うことはいくつかある。教室に必要な備品がそろっているかどうかを常に事前にチェックするとか、到着する講師などの車の手配を事前に表にしておいてきちんと管理するとか、とにかく細部にわたって、事前にきっちり準備することを求めた。もちろん、内容を充実させるためには周到な準備が必要だと今でも思う。だが、中国側事務局にしてみれば、「日本側はあまりにも細かいことばかり指示する。教室に備品がなければ、隣の教室からもってくればいけないじゃないか。車だってそのときに融通をきかして手配すればいい」と思っていたことだろう。このように、どちらかが完全に正しいといえないようなことは細かいレベルでもたくさんある。相手が大切だと思っていることを理解し、ときにはぶつかりながら折り合いをつけていくしかないのだろう。



第3回研修会の事務局運営を手伝ってくれたハルビン市内の日本語教師と



第3回研修会でTJFから教研員に感謝状を贈る



第4回研修会の吉林省会場(延吉)の講師たちと

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

■「お客様」から「仲間」へ

また、私たちが「お客様」から脱却し、同じ「事務局スタッフ」という関係をつくるのにも時間がかかった。最初の3回は、日本側事務局には中国側事務局とは違う部屋が用意され、きれいな部屋には常に水や果物などがおかれていた。また、市内の移動などには、中国側がほぼいつも車を用意してくれた。私たちも、「同じ事務局スタッフなんだから」と口では言いながらも、そうした中国側の好意に甘えていた部分があったと思う。回を重ねていくうちにお互いに折り合いをつけ、少しずつ車の手配を頼むことも減り、事務局の部屋もいっしょになってコミュニケーションがとりやすくなっていった。そこまでいくのに、お互いを知る時間が必要だったのだと思う。

私にとって、研修会は、「異文化衝突」や「異文化間調整」を単に頭のなかで理解するのではなく、とてもわかりやすい形で実践できた貴重な経験として、一生忘れられないものとなった。

室中直美

日中の狭間で

TJFの仕事に関わったのは、青年海外協力隊日本語教師隊員として中国に赴任した1994年、南京で開催された第3回日本語弁論大会で講演したのが最初である。1997年TJFに入った時には、対中事業はすでに教師研修に切り替わり、第2回研修会の開催を控えていた。その対中事業のカウンターパートである各省の教研員や学院関係者とはじめて面識をもったのは、第3回研修会を準備するために中国に出張したときであった。以来その方たちとは8年越しの付き合いとなり、共同プロジェクトの仲間として、友人として、果ては「娘」や「妹」として、可愛がられ、また助けられてきた。その中で仕事の大変さを知り、楽しさを覚え、人の温かさを身に沁みて感じた。こうした経験は、この仕事を続けていく原動力となり、一生の財産となっている。

プロジェクトの主担当となったのは、省別開催が始まった年からである。1会場から3会場になったからといって、予算が3倍に増えたわけではなかった。従来に近い予算の中でこれを実現させなければならなかった。私としては、「これは、中国で開催する中国人教師のための研修会だから、中国の現状に合った条件で実施することは不可能ではない」と思った。今でも私は、ぎりぎりの運営予算内でのやりくりを中国側に強いた張本人として、教研員に恨み言を言われている。「中国を知りすぎたせいだ」と。同じ理由で信頼されてもいるのだが。

■両方理解できることで感じるやりがい

教研員と付き合うなかでよく、「これはあなたの上司に言わないでください」という前置きや念押しをされてから相談されることがある。「なぜ?」と訊ねると、「日本人と中国人はどうし

たって完全には分かり合えない。下手に話すと要らぬ誤解を招くのが落ちだから」とか、「中国人の面子に関わるから」などという答えが返ってくる。それも道理だ、と思う自分がいる。でも、話さなければ分かり合えない、とも思う。完全に分かり合えないが、分かり合える部分を多くしていくための努力が必要だと思っている。とかく「支援する側」と「支援される側」という構図は、中国側の「遠慮」と「自尊心」という二つの感情を刺激することは確かであり、逆に日本側に「感謝されて当然」という好ましくない感情を派生させやすくもする。これは青年海外協力隊時代から考えていたことである。だからこそ、この研修会を「文化交流事業」と位置づけることの意味は大きいと思う。TJFのスタンスを端的に表している言葉であるが、それ自体、日本側の自戒と中国側との対話を促す効果もあるように思うからである。結局、教研員には申し訳ないが、「上司に言わないでください」と言われても、プロジェクトに関することは、ちゃんと上司に伝える。なぜなら、教研員の言葉からは、状況を改善したい、問題を解決したい、日本側にもっと理解してほしい、という気持ちが汲み取れるからだ。もちろん、「遠慮」と「自尊心」を念頭におきつつ、「要らぬ誤解」がないように、「尾ひれ」をいっぱいつけて伝えるのである。これがきっかけになって日本側の中国理解が深まれば、という願いを込めて伝える。それが、中国と日本の両方で育った自分が担うべき役割だと思うからである。

■両方理解できるからこそその辛さ

とは言え、日中の狭間で困惑することもよくある。その端的な例が宴会。昼夜なく働く講師やスタッフに何とか感謝の気持ちを表したい、慰労したい、昼食は研修生と同じものの、夕食はほったらかしでは、はるばる日本から来た友人たちに対して、ホストとしての礼を欠く、ということで招待してくれる。しかし、講師は心身ともに余裕のない方が多く、負担でしかない。「またか」という顔をされる。中国は宴会が好きなんだから、という空気も流れる。こちらは学院側の苦心や好意も分かるし、講師の心身の負担も研修第一主義も分かる。でも断ってばかりもいられない。3回に1回は受けないと、ホスト側の面子がつぶれる。両方に申し訳ない気持ちで、ホスト側には「ご馳走はありがたいが、酒はほどほどに」とあらかじめ申し上げておく。それでも酒を勧めることが最上のもてなしとするのが東北の文化。素気なく断られて座が白けそうなのを見れば、たまには助け舟も出さなければならない。代わりに杯を受け、返杯して感謝の意を述べ、場を盛り上げてみる。でも、そこで感謝され、慰労される主役はあくまでも講師たちであって私であってはならない、と自分に言い聞かせる。文字どおり体を張り、気を遣いまくる宴会は正直疲れる。なのに、宴会が終わってある講師から一言、「私たちはあなたみたいにお酒に強いから」と。「ああ 酒好きと 思われる身の 辛さかな トホホ」という気分になる。だからこそ、私の役割はまだまだ終わらない。

長江春子

2. 研修会後の状況と展望

中国中高校日本語教師研修会は、中国の初中等レベルの日本語教師に対する支援がほとんどない状況の下でスタートしたプロジェクトである。しかし、本研修会を継続して実施した6年の間に、当初は助成あるいは協力団体であった国際交流基金と国際協力機構(JICA)は、初中等レベルに対する支援体制を強化し恒常的な支援活動を展開するようになったこともあって、本事業に対してもより積極的に関わってくれるようになった。井戸掘り役を担った民間として、研修会が一定の成果を上げ現地側にも素地ができ、かつその後の恒常的な支援が必要な段階に移ったところで、資金力、組織力ともにすぐれた国際交流基金と国際協力機構に支援の中心をシフトできたことは幸運だった。

ここでは、研修会後の各省の取り組みやそれに対する支援を概観しつつ、今後の課題についても触れる。

(1) 初中等日本語教育への支援の強化

国際交流基金は、北京日本学研究中心(前身は大平学校)と東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校の両機関だけに派遣していた日本語教育専門家を、1999年にはじめて北京事務所にも1名派遣し、事務所付き日本語教育アドバイザーとして、初中等レベルをも含めて日本語教育支援を展開するようになった。日本語教育アドバイザーは、中国中高校日本語教師研修会の第4回から第7回に講師として参加する一方、2000年からは年に数回、小中高校の日本語教師を対象とするセミナー^{※3}を中心になって実施している。また手紙や電話による日本語教育相談に日常的に対応しつつ、「215教師メーリングリスト」や「215教師ウェブサイト」を立ち上げ、中国で教えている日本語教師(日本語ネイティブ、ノンネイティブを問わず)との情報交換に努めている。その後、国際交流基金は、2001年から東北三省の教育学院に対しジュニア専門家(当時、青年日本語教師)の派遣を開始した。青年日本語教師は日本語教育アドバイザーに協力して上記セミナーを実施するとともに、配属先である教育学院の日本語教員

※3：国際交流基金北京事務所、中国課程教材研究所、各地の教育学院・教師進修学校などの共催、会期は3～4日間程度。事務所がある北京市内や東北地域以外の地域も対象としている。

2001年、黒龍江省研修会の研修生受付日、山東省の高校で日本語を教えている教師が突如会場に現れた。賈俊格さんである。「そんな遠いところからどうしてわざわざ」と尋ねると、国際交流基金が北京で開催した日本語教育セミナーに参加したとき、東北三省で本格的な中高校日本語教師研修会が毎年開かれていることを知り、自費でも聴講でもかまわないからなんとしても参加させてほしいと思って押しかけた、と言う。どの会場も参加者枠が決まっており、運営費もきっちり計算されていたが、黒龍江省会場の運営実務を担当する張石煥教員は、賈さ

んの熱意に動かされて、日本側主催者の了承を得たうえでその参加を認めた。

遼寧省の教員のところにも、全国会議などでたまたま研修会のことを知った山東省や福建省の中高校日本語教師から「東北地域の教師が羨ましい。南の地方でも研修会を開催してほしい」「東北の研修会に南の教師も参加させてもらいたい」という要望が寄せられていたという。東北地域に限らず、現場の教師はこのような研修の機会を待ち望んでいる。

(TJF)

と協力してその地域独自の教師研修や教研活動を行っている。

JICA は、もともと大学を中心に派遣していた日本語教師隊員を、1990年代初めから中等教育機関にも派遣するようになったが、派遣人数は1990年代後半まで年間1～5名程度にとどまっていた。しかし、2000年以降、派遣人数を倍増させ、2005年2月現在で、中等教育機関に派遣中の日本語教師隊員は15名(その他高等教育機関配属20名、社会人教育機関配属2名)になっている。隊員の活動は、配属先のカウンターパートをはじめ配属先の周辺地域も含む中国人日本語教師の育成や、配属先の生徒を含む日中の青少年間の相互理解の促進も視野に入れている。複数の隊員が配属された地域においては、隊員たちは連携し、地域単位での支援(ミニ教師研修会の実施、スピーチコンテストや日本祭りの開催など)も積極的に行っている。一方で、国際交流基金派遣の日本語教育アドバイザーやジュニア専門家が中心になって実施するセミナーや研修会にも協力している。

この二つの動きは、中高校日本語教師研修会後の初中等日本語教育支援において、大きな役割を果たしているといえる。2002年以降、TJFはこの動きを見守りつつ、上記2機関ではカバーしきれない部分に対し、中国側の要請に応じて引き続きフォローを行っている。具体的には、遼寧省および吉林省の教研員が企画し、ジュニア専門家の活動資金が導入できない活動、および現在、ジュニア専門家が配属されていない黒龍江省と内蒙古自治区の教研員が企画した資金的に当てのなない活動に対して、中高校日本語教師研修に関するものを中心に助成を行っている。

このように、日中の関係機関が協力し合い、また自然発生的に役割分担を行った結果、中高校日本語教師研修会の実施当初からめざしてきた教師研修の「現地化」が実現したのである。

(2) 中等教育レベルにおける日本語教育の状況変化

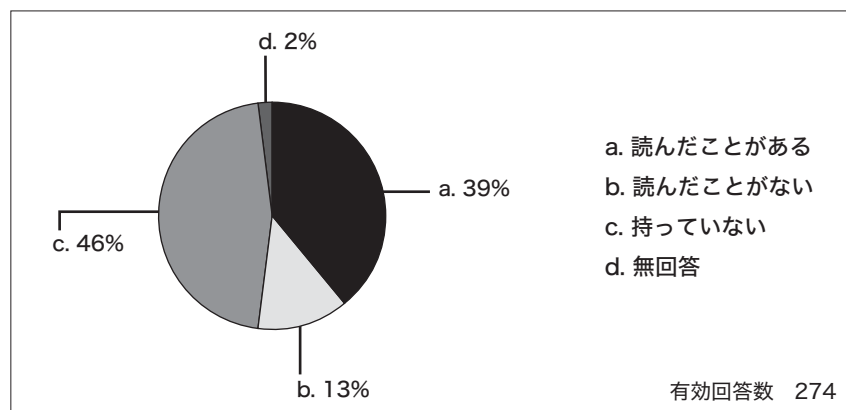
①飛躍的变化を見せた中国の教育理念

研修会を実施した間に、中国の日本語教育事情は大きく変わった。「教学大綱」の改訂、そして「課程標準」への移行、それに伴って教科書も新しくなった。

理念のレベルにおいては、外国語教育は読み書き・文法中心からコミュニケーション志向へ、さらには素質教育重視へと大きく変わった。そうした流れのなか、大学入試は4技能のバランスを考慮するようになり、現場教師たちの意識と実践においてもコミュニケーション志向が少しずつ浸透するようになった。

しかし、まだ「課程標準」を手にしたこともなく、読んだこともない教師が多いようで(次頁の表参照)、今後は、「課程標準」の中心理念である「素質教育」をめざした日本語教育の現場レベルでの実現に向けて、啓発活動や研修活動を行っていくことが求められるであろう。

表：『課程標準』を読んだことがありますか



②中等教育段階における日本語教育の衰退と新たなニーズ

しかし、中等課程の日本語教育が理念のレベル、教科書のレベル、実践のレベルにおいて確実に大きな進歩を遂げたものの、中高校における日本語教育の規模は急激な勢いで縮小している。第Ⅱ章のアンケート結果がその一端を物語っているように、研修を受けた教師の中にも、やむを得ず日本語教育から離れた人や教師という仕事から離れた人すらいる。端的な事例としては、研修会のスタート当初は、黒龍江省ではハルビン市を中心に複数の漢族の中高校で日本語が実施されていたが、1999年あたりから新たな生徒を募集しなくなり、2001年になると全滅状態になった。かつてすべての中高校において日本語が実施されていた吉林省延边朝鮮族自治州においても、地方教育行政の政策が2000年あたりから日本語廃止に傾き、現在まで生き残った学校はわずかである。

国際交流基金が2004年に発表した「日本語教育機関調査・2003年」によると、中国における日本語学習者の総数は1998年の24万人から2003年には38万人に増えているものの、中等教育機関における学習者数は、1998年には12万人だったのが2003年には8万人に激減し、アメリカに抜かれて世界第3位から第4位に落ちている。実施機関数においても1998年には422機関だったのが2003年には302機関に減少し、教師の数も1588名から1106名に減っている。こうした背景には、受験資格を「英語既習者」に限定する大学や専攻が増えたこと、大学院の進学に英語が必須であること、コンピュータの時代には英語学習者が有利であること、欧米への留学機会が増えたことなどによる英語教育の隆盛が挙げられる。

新たなニーズに対応

研修会を開催している期間に、こうした中等教育における日本語教育の衰退が進んでいった。将来の展望がないものをなぜ支援するのか、と関係者から何度となく問われた。日本語が第一外国語として位置づけられている以上、英語に取って代わられることは時代の趨勢であり、実施校の数の減少はやむを得ないと認識していた。しかし、ある一定数の日本語教育

実施校を残したいとする教育行政の方針がある限り、また校長裁量で日本語教育を学校の特色として掲げたいとする学校がある限り、その拠点となる学校の灯を絶やすことなく日本語教育の質を維持する手助けをしたいと考えていた。また、競争の激しい英語よりも、日本語と文法的に似ている朝鮮語やモンゴル語を母語とする有利性を生かして高得点をとりやすい日本語を選択した方がいいとする朝鮮族や蒙古族教育関係者の主張もあった(100頁参照)。さらに、これからは英語ができて当たり前、プラスアルファの外国語を身につけてこそ付加価値が出るといった考え方もあり、第二外国語教育としての日本語教育が新たに芽生えてくることが視野に入っていた。それまで何とか日本語教師を応援していきたいと思っていた。

一方、日本企業の中国進出の勢いは衰えず、沿海地域を中心に日中間における経済交流や文化交流がますます盛んになり、観光者数も増えている。そうした地域の職業中学や職業中専における日本語学習者数はむしろ増加傾向にあり、教師不足と教師の質が問題になっている。今後は第二外国語としての日本語教育と職業中学や職業中専における日本語教育を視野に入れた支援や教師研修プログラムの実施が必要となってくるだろう。

(3) 研修会に代わる支援事業

①中高校の教師とのネットワーキングと情報提供

TJFは研修会以外に中国の中高校日本語教師を恒常的にサポートする事業として、1999年に情報誌『ひだまり』(季刊)を創刊し、連絡先を把握している1200名の日本語教師に送付している。『ひだまり』は創刊当初から新教科書に出てくる文法や表現に関するQ & A、日本語の言語習慣や言語知識に関するコラム、コミュニケーション力を伸ばす教授法を扱うとともに、日本語学習と文化理解を統合した日本語の授業について提案してきた。2003年度からは「課程標準」が提唱する「素質教育」に照準を合わせ、日本の中高校生の生活や現代の文化事情を素材にしつつ、「素質教育」をめざした授業づくりを提案してきた。今の入試体制と学校体制では、『ひだまり』に掲載されている教室活動や教え方はすぐには取り入れられないという教師もいる。しかし、「ヒントを得た」「自分でも工夫してやってみた」「公開授業で『ひだまり』のアイデアを借りて成功した」という声も少しずつ聞かれるようになってきた。また、なかなか授業には生かせないでいるが、素材そのものを毎回興味深く読んで、という教師も多い。中高校教師の声や中高校教師の置かれている状況、日本語教育の環境などを念頭に置きながら、「素質教育」および文化理解や相互理解につながる日本語教育の一助となるよう、理念だけでなく実践に役立つ誌面づくりを地道に丁寧につづけていきたい。

また、インターネットやコピーがまだまだ普及していない中高校の現場に対し、現段階では紙媒体での情報や素材の提供は依然として重要であ



『ひだまり』本誌



すぐに授業で使えるようにワークシート例なども提供



現在の日本文化事情を写真と文章で紹介したカラー頁。授業の素材として活用

と考え、2005年度からは誌面を一新してフルカラーにし、写真素材などによる効果向上を図る予定である。しかし、農村地域を含む中高校現場へのパソコンの普及は時間の問題だろうと予測される。したがって、「ひだまり」ウェブページの作成やメールによる「ひだまり便り」の配信も継続して行っていく予定である。

なお、国際交流基金北京事務所日本語教育アドバイザーによるインターネットやメールを活用した日本語教師支援が展開されている(93頁参照)。初中等教育機関と高等教育機関、日本語ネイティブとノンネイティブを含めているが、コンピュータの普及とともに、初中等のノンネイティブ日本語教師の参加が増えることを期待したい。

②小学校日本語教育支援の開始

東北三省では、中高校での日本語教育の生き残りをかけて、小学校での日本語教育の開拓と定着を図る努力がなされている。

黒龍江省では、2000年より、中高校で日本語教育が盛んな朝鮮族集住地域を拠点にして試験的に3校の小学校において日本語教育をスタートさせた。そして、これらの小学校の日本語を担当する教師を、2001年の黒龍江省で開催した中高校日本語教師研修会に参加させた。その後実験校の数を増やし、2002年研修会には9校の小学校から各1名の日本語教師を参加させている。中高校日本語教師研修会への小学校教師の参加は、カリキュラム、クラス運営、中高校日本語教師との日本語レベルの差などさまざまな問題があったが、黒龍江省側からの要望が強く、日中間で話し合った結果、これを認めた。

また、遼寧省では、1980年代後半から大連の漢族の小学校を中心に日本語教育が盛んになり、ピーク時は1万7000人の学習者数に達していたが、1990年代半ばからは英語におされて衰退していった。一方、遼寧省の日本語教員が中心になって、国際交流基金、三菱銀行国際財団、TJFからの資金的援助を受け、小学校用として初めて本格的な教科書(101頁参照)が出版されるのに伴い、阜新県(正式には、阜新蒙古族自治县)という小学校日本語教育の新しい拠点の開拓に成功している。

こうした動きを受けて、TJFは中高校日本語教師研修会が一段落したことから、2003年度より、遼寧省基礎教育研究教師研修センター(前遼寧教育学院)との共催で、全中国を対象とした小学校日本語教師研修会のプロジェクトをスタートさせた。実際はSARSの影響により、写真教材(次頁コラム参照)の制作・寄贈と副教材パック(次頁コラム参照)の選定・寄贈を先行させ、第1回研修会は2004年度に開催、50名が参加した。100名いるといわれる小学校日本語教師が全員研修の機会が得られるよう、向こう2年間は継続して研修会を実施する予定である。また、研修会と併行して、日中の小学生の交流促進事業を開始した。TJFが橋渡しをした佛寺小学校と東京の大久保小学校では、手紙や生徒の作品を交換するなどの交流が始まっている。こちらの支援も継続して行っていきたい。



TJFが制作・寄贈した写真教材「日本の小学生生活」の写真シートを熱心に見る研修生



講師と研修生がひまわりの種を食べながらの茶話会。中高校日本語教師研修会での経験が生かされた



テーマに基づいたワークショップ型の授業を楽しむ研修生

写真教材：写真シート（カラーA3判35枚）、冊子（A4判108頁）、音声テープ（30分）

写真シートは、TJFが1995年に制作した小学校3年生の「けんたろうくんの一日」の写真の一部(13シーン)と、2003年秋に新たに撮影した東京都内の区立小学校の「6年1組の一日」の写真(31シーン)で構成されている。「けんたろうくんの一日」は、石川県金沢市に住む高峰憲太郎くんの起きてから寝るまでの一日を、学校での生活も含めて記録している。「6年1組の一日」は、6年1組の子どもたちの学校での一日(授業、休み時間や放課後の遊び、給食、委員会や係の仕事など)を記録している。

冊子には、写真シートの各シーンについての説明と、日本の小学生の生活に関する補足情報を日中2ヵ国語で掲載している。また、テープには、憲太郎くんと6年1組の子どもたちによる海外の子どもたちに向けたメッセージ

を収録している。日本語を勉強する海外の小学生に、実在する日本の小学生や学校という生きた素材を通して、日本の小学生のことや学校生活について理解を深めながら日本語を学んでもらうことを目的に制作した。



副教材バック

遼寧省基礎教育研究教師研修センターでは2001年度から2003年度にかけて、国際交流基金、三菱銀行国際財団、TJFの助成を受け、小学校向けの日本語教科書『小学日語教材』の制作に取り組んだ。2003年度の完成に合わせて、TJFは同研修センターと協議のうえで、教科書を補完するさまざまな視聴覚教材や教具などの副教材を、日本語教育を実施する中国の小学校や教育センターに寄贈するプロジェクトを企画、また副教材バックに含める副教材の選定を行った。

副教材バックには、年少者に対する日本語教育のために制作された教材・教具（「すごろくゲーム・にほんご探検」）のほか、日本の子どもたちがことばを学ぶために用いるひらがな・カタカナ表、くもん式のことば絵カードシリーズ、ことば絵事典、絵本、学習世界地図・日本地図などのほか、日本の子どもたちの生活や遊びの一端を体験し、遊びの中からことばが学べるように、ペーゴマやけん玉、お手玉、福笑い、竹とんぼ、テープ付き童謡集、教室活

動のための小道具として利用できるおもちゃのマイクやお金セットなどを入れた。さらに、これらの副教材を活用してもらえるよう、副教材の説明および使い方を記した手引き（日中語併記・日本語は振り仮名付き）と、日本語教育専門家3名の協力を得て、副教材を使った教室活動例やおもちゃの遊び方の実演を収録したビデオも制作した。

なお、これら副教材の購入と副教材バックの輸送については日本の外務省所管の「草の根無償資金協力」を受けた。



(4) 研修会後の各省の動向

中国中高校日本語教師研修会後、TJFは、各省の教研員が中心になって企画・実施する日常的な日本語教育研究活動(研究会、研修会、発表会、シンポジウム、ワークショップ、学習奨励などを含む)に可能な限り支援しつつ、初中等教育レベルにおける日本語教育を取り巻く各省の状況を見守り、情報交換に努めている。各省の状況は異なっており、当然抱えている問題も一様ではない。初中等教育の現場を統括する立場にある教研員の苦悩と課題は尽きることがない。TJFは中国の初中等教育レベルにおける日本語教育を、国や文化を超えた「次世代の教育」という共通課題の一環として捉え、今後も地道に取り組んでいきたい。

① 吉林省

吉林省では国際文化フォーラムの助成を受け、2003年度に「日本語教育と異文化理解」シンポジウム、2004年度に「吉林省第1回中高校生日本語スピーチコンテスト」の全省規模の大きな活動を行った。

シンポジウムには、省内の中高校の日本語教師約70名が参加し、想像以上の盛況ぶりだった。教師による模擬授業、論文発表のほか、「日本語教育と日本文化」「異文化理解のための個文化理解」「日本語教育の中でどう文化を捉えるか——ステレオタイプを利用してステレオタイプを乗り越えて——」といった講義が中日の専門家によって行われた。中高校の教師が集まってこうしたテーマについて発表し、学び合うシンポジウムは、中国国内においてこれが初めてではなかっただろうか。国際文化フォーラムは、中高校日本語教師研修会を通して、日本語教育に文化理解を浸透させていくべきだという新しい教育理念を提示してきた。と同時に、このテーマに関連する教材や資料、情報誌などを日本語教師たちに寄贈し、教師たちの実践を考え方や素材、経験の面で力強く支援した。こうして新しい教育理念と実践方法は教師たちに深く根付くようになった。この機運を捉えて、シンポジウムを開催したのである。

一方、スピーチコンテストは、コミュニケーション志向の授業を提唱するために開催したものである。中高校生、引率教師、地域の教研員、ジュニア専門家を含め約60名が参加し、出場した生徒と引率教師を大いに奮起させた。出場した生徒たちからは、コンテストへの参加は、日頃の実力を発揮できただけでなく、口頭表現力を鍛え、他校の生徒と交流を深めるまたとない機会となった、という感想が寄せられた。また、引率教師からは、今後もコンテストを継続してほしいという要望が出され、関係者一同、今後隔年で実施することを確認し合った。コンテストの実施に際しては、日本語を学習している中高校生のことを広く知ってもらうために、マスコミへの働きかけを積極的に行った。また、開催に先立って行われた地区予選も、各地区の中高校日本語教育の振興に寄与したと考えている。

吉林省では、日本語を開設する学校数、特にクラス数が減少している。つまり、現在抱えている最大の問題は学習者数の減少である。この減少傾向をいかにして抑制するかが今後の課題となろう。日本語は国家が規定する教育課程に組み込まれた科目の一つである。衰退に任せておくわけにはいかない。今後は、全省を対象とする調査を行い、日本語の開設状況に関する正確な数字を把握し、学習者減少の原因を突き止め、有効な対策を積極的に講じていきたい。対策の一つとしては、今後も教師研修に力を入れ、研究会などの実施を通して、教師たちの教授力を向上させ、それによってもっと多くの子どもを日本語学習にひきつけたいと考えている。

尹勝傑（吉林省教育学院日本語教研員）

（本書に掲載している尹勝傑氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

② 黒龍江省

中高校日本語教師研修会后、われわれは、国際文化フォーラムやジュニア専門家などの協力を得て、中高校の日本語教師に対し、地域とテーマを限定した小規模の研修会を定期的の実施してきた。今後もこれを継続していきたいと考えている。主に経験交流、公開授業、論文発表などの形式を通して教師研修を行い、同時に情報交流を促進したい。必要に応じて中学と高校を別にして実施したいと考えている。

この数年、全国的に日本語教育が著しく衰退している。多くの中高校では日本語から英語に切り替えている。黒龍江省でも2000年あたりから、漢族の中高校の日本語教育は全滅状態になった。しかし、朝鮮族の中高校では、日本語開設の規模は縮小していない。これは、日本語教育が受験に不利な少数民族の進学率向上に貢献しているという事情があるからである。日本語は朝鮮語と語順が似ており、朝鮮族が学ぶのに大変都合がよい。日本語を学習したお陰で、朝鮮族の生徒たちは長年にわたり大学入試で漢民族と肩を並べており、清華大学や北京大学をはじめさまざまな名門大学に多数の生徒が進学できた。最近の大学入試の日本語と英語の成績を比べると平均20点の差がある。1点の差で合否が分かれる大学入試で、この数字は驚くべき数字だ。また、現在の就職状況を見ても、日本語ができることで、大学に進めなくとも活路を見出す生徒は多い。したがって、朝鮮族の生徒たちにとって日本語の学習は大学進学やその後の進路において非常に有利であるといえる。このような状況を見れば、日本語を選ばない手はない。

また、中高校と同様、小学校でもわれ先に英語を導入し始めている。しかし、一旦小学校で英語を勉強すれば、中高校や大学に進んでもみんな英語を選択するに違いない。そうなれば、中国の改革開放の国策に反する結果となる。というのは、全国で一つの外国語しか学ばないというのは、国の人材需要に応えることができないのは明らかだからだ。そこで、黒龍江省では2000年に小学校に日本語教育を実験的に導入した。当初3校だったのが、現在は15校に増えている。今後は実情に合わせて、段階的に拡大しつつ、定着を図っていきたい。国際文化フォーラムが2004年からスタートさせた全中国小学校日本語教師研修会は、わが省の小学校日本語教育を強力に支えることになるだろう。この研修会開催期間中、会場を訪れた国際文化フォーラムの事務局長と会合をもった時、事務局長はわが省の小学校日本語教育に対し大きな関心を示し、今後も教師研修の機会を提供していきたいと言われた。われわれも、省内の小学校日本語教育の継続的発展を維持するためには、小学校日本語教師全員を研修させる必要があると考えている。

張石煥（黒龍江省教育学院日本語教研員）

（本書に掲載している張石煥氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

3 遼寧省

遼寧省で日本語を開講している学校は168校あり、日本語教師は629名いる。この数字は漢族、朝鮮族、蒙古族の小学校、中高校を含む。7回の研修会に参加した中高校日本語教師は140名近くに上る。また、33名が2004年の第1回全中国小学校日本語教師研修会に参加した。そのほか、国際交流基金と国際文化フォーラムの援助のもと1996年から2004年にかけて省内で開催した13回のミニ研修会には延べ535人が参加した。ほぼ全員が研修会に一度は参加し、日本の専門家の授業を直接受けることができた。このことは他の教科では想像すらできないことである。

ミニ研修会では、中学と高校を分け、毎回日本人講師に関わってもらった。これは、7回の研修会を通じて、中学と高校の教師の研修会に望む内容が同じでないこと、日本人講師が果たす役割の大きさが分かっていたからである。その後、日常的な教研活動においても日本人講師に関わってもらえるように、ジュニア専門家の派遣を要請し、2002年に実現した。これらの経験と人的資源を基礎にして、遼寧省骨干教师^{*4}研修会を開くことができた。今後は、日本語の知識だけでなく、生徒に問題意識をもたせ、自力で探求することによって答えを見つけさせる方法について、教師とともに考えるような研修会が行われることが望ましいと考える。

一方、遼寧省では、1980年代後半から、大連市金州区の小学校（漢族）を中心に日本語教育が行われてきた。1990年代のピーク時には開設校47校、学習者1万7000名、日本語教師が約50名に上った。

2000年以降、国際交流基金をはじめ三菱銀行国際財団、国際文化フォーラムの支援を受けて、遼寧省ないし全国においても、初めての本格的な小学校用日本語教科書『小学日語教材』が完成した。これを機に、阜新県という小学校日本語教育の新たな拠点を得た。しかし一方で、大連市の漢族の学校では日本語を中止したり再開したりと、不安定さを孕んでいる。このような時期だからこそ、日本語教研員自身の絶え間ない努力と教育行政への積極的な働きかけ、日本側の継続した支援が望まれる。

曾麗雲（遼寧省基礎教育研究教師研修センター日本語教研員）

（本書に掲載している曾麗雲氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

※4：一定基準によって選ばれた候補者が、規定の研修と課題を修了し、審査に合格した人のみ骨干教師として省教育庁によって認定される。遼寧省では2001年に、向こう10年以内に、各教科の教師総数の1%を研修させる計画を発表した。毎年1000人に1人の割合である。そのため、総数が1000人に満たない日本語教師は、当初からこの計画に含まれていなかったが、曾麗雲氏をはじめとする日本語教研員が関係者と交渉した結果、特例として2003年度骨干教師研修計画に20名の小中高校日本語教師が組み込まれることになった。骨干教師は、教育理論、教授技能、コンピュータ技術（資料収集、教材作成、プレゼンテーションなど）を身につけることが必須である。教授技能については、過去7回の研修会への参加をもって、修了と見なされた。教育理論とコンピュータ技術一般については、他教科との共同研修がある。この骨干教師研修会は、日本語ソフトを使った研修を中心に行われた。

『小学日語教材』

聞く・話す能力の育成をめざしたコミュニケーション志向の教科書。また、日本語の語感を習得させ、文化理解を促進することをめざしている。小学生を主人公に設定し、学校や家庭での勉強場面、生活場面、遊びの場面を中心に、各課の内容が展開されている。「です」「ます」体の教科書ことばではなく、子どもの話しことばをベースに、先生や大人との会話場面では丁寧語を取り入れている。また、小学生が親しみやすいようにフルカラーで印刷されており、絵やイラスト、ゲーム、歌などを全面的に取り入れている。さ

らに、教科書の内容を収録した付属テープは、音声の正確さを表現するために大人の声で吹き込んだものと、子どものことばを表現するために日本の小学生の声で吹き込んだもの、2種類からなっている。



4 内蒙古自治区

2004年現在、自治区内で日本語を開設している中高校は約20校、教えている教師は約60名いる。これらの中高校は、一、二校を除き、高校から日本語課程を始めるケースがほとんどである。高校から日本語を開始する場合は、3年間で6年間の学習内容を消化しなければならない。しかし、高校から開始する学校でさえ近年は減少傾向をみせている。中学スタートの学校はすでに生徒募集を止めているので、これから日本語は廃止されるか、高校からの開始に改められるかであろう。

このような状況変化の原因はいくつか考えられる。まず、小中高校における英語科目の隆盛がある。特に、2001年教育部から小学校での英語開設に関する通達が公布され、今後小中高校の外国語教育科目は英語に限定されるだろうという印象を社会一般に与えた。二つめは、大学入試である。以前は日本語を履修した場合、大学入試の難易度の面で優遇が受けられた。日本語学習者の得点は英語学習者よりやや高かったため、大学に入りたい生徒は進んで日本語を選択した。しかし近年、日本語の試験問題の難易度が上がった。日本語を開設する学校にしてみれば、得るものより失うものが大きくなったわけで、これが日本語の大幅な減少または停止につながっている。三つめは、以前、日本語を開設していた学校には、質の高い英語教師が不足していて、逆に質の高い日本語教師がいた。しかし近年、各大学の英語本科および専科は募集枠が拡大し、大量の卒業生を社会に送り出している。これは日本語を止めて英語に切り替えたい学校にとって、教師の人材が用意されたことになる。そのため、一部の中高校は英語への切り替えに踏み切った。四つめの原因としては、以前日本語を開設していた学校には、日本語教育に熱心だった校長がいたが、彼らが離退職したことで、日本語教育が廃止されたことが挙げられる。

今後日本語教研活動を主催し、実施するにあたって困るのは、内蒙古の教育予算が少ないことである。毎回の実施には、国際文化フォーラムの助成はあるものの、他にも資金的援助を求めなければならない。次に困るのは、私の専門がロシア語であるため、日本語教研活動を行う場合、招集はできるが指導ができないことである。第三に困るのは、内蒙古では日本語を開設している学校数が少なく、しかも東西に散在してお互いに遠く離れているため、一カ所に集めることが難しいことである。したがって、東北三省と比較して日本語教研活動を行う際の困難はきわめて大きいといえる。

しかし、日本側の強いサポートを受け、教師たちの声に応えるべく多くの問題を克服して教研活動を実施してきた。厳しい状況ではあるが、今後も日本語教師と日本語教育のために微力ながら精一杯努めていきたいと思っている。

陳弘法（元内蒙古自治区教育厅外国語教研員）

（本書に掲載している陳弘法氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）